

そこで臨床像ならびにウイルス分離とから全身性サイトメガロウイルス感染症と診断された年令3～5カ月の4症例の臨床検査所見と肝生検組織像を検討し、新生児肝炎と比較した。これら全身性CMV感染症の血清総ビリルビン値は3.0～7.2 mg/dl (平均4.2 mg/dl)で、新生児肝炎のそれに比しやや低値を呈した。この内直接型は50%～83%で新生児肝炎と差がなかった。S-GOTは58～485 u., S-GPTは31～460 u., アルカリ性フォスファターゼ値は44～77 u.と上昇し、これらも差がなかった。しかしながら肝組織像では門脈域を中心とした円形細胞浸潤と軽度の胆汁う滞以外にはほとんど変化がなく、肝細胞の変化を主な所見とする新生児肝炎とは明らかに違った病理組織学的所見であった。この結果より考察するとCMVは乳児期には新生児肝炎に似た肝障害を呈するが、典型的な巨細胞性肝炎の病理組織像を呈する新生児肝炎はCMV以外の病因によるものと推定される。しかしながらCMVが本症に何らかの関与を持っている可能性は完全には否定し得ない。また臨床像のみから新生児肝炎を診断した場合には、CMVによる全身性感染症の内、肝障害が前面に出た症例は当然区別し得ない可能性が考えられる。

3) 風疹ウイルス

風疹ウイルスに対するHI抗体価は新生児肝炎7例中5例で上昇していたが、抗体価は4例が8倍～32倍で母から経胎盤に由来したものと考えられた。1例は1024倍と高値であったが、母も同様に上昇しており、経過を追ったところ消失したので、やはり母由来と考えられた。また咽頭ぬぐい液よりの風疹ウイルス分離は陰性であった。

先天性風疹症候群で新生児肝炎と区別しえない肝障害が報告されているが、最近の我国における風疹の爆発的流行後も本症が増加している傾向はうかがわれぬ。

新生児肝炎の大部分の症例は風疹ウイルスによるものではないと推定される。

4) その他のウイルス

この他、単純性ヘルペスウイルス(HSV)、アデノウイルス、コクサッキーB_{1,2,6}に対する血清抗体を検索したが、HSVに対する抗体価の低い上昇が新生児肝炎の7例中1例、先天性胆道閉鎖症1例にみとめられたに過ぎず、これらウイルスの関与もほとんどないものと考えられた。

VI. 結 論

1) B型肝炎ウイルスは新生児肝炎の一部症例の病因となっているか或いは何等かの形で関与しているものと推定されたが、大部分の症例ではB型肝炎ウイルスは病因でないと考えられた。

2) サイトメガロウイルスは新生児肝炎、ないし先天性胆道閉鎖症と何等かの関連を有するよう思われたが、病理組織学的検討からはこのウイルス単独では新生児肝炎の病因とはならないと推定された。

3) 風疹ウイルス、単純性ヘルペスウイルス、アデノウイルス、コクサッキーウイルスは新生児肝炎、先天性胆道閉鎖症の主たる病因ではないと推定された。

4) 以上より新生児肝炎の大部分の症例は既知の上記各種ウイルス感染以外の病因によって起っているものと考えられた。

新生児肝炎および先天性胆道閉鎖症における

サイトメガロウイルスの関与

都立駒込病院 南 谷 幹 夫

新生児肝炎、先天性胆道閉鎖症の症因は明らかではなく、先天感染が有力な病因として考慮されており、また両疾患は同一病因であるとする説もある。われわれはすでに乳児肝炎よりサイトメガロウイルス(CMV)を分離し、また各種肝疾患ならびに重症疾患におけるCMVの関与について発表しているが、新生児(乳児)肝炎の

原因にはCMVのほか、ヘルペスウイルス、風疹ウイルスも挙げられる。新生児肝炎の大きな原因としてCMVを肯定する成績も知られる一方、CMVの感染形態である自然感染へ持続排泄という性質上、原疾患に対する病因的意義を明確にすることは他のウイルス性疾患に比して困難を感ずる点が少なくない。

表 1 Congenital Biliary Atresia

No.	Case	Age	Material	CMV-Isolation
1	N. S.	0y 5m	Urine Liver biopsy	(-) (-)
2	Y. S.	3 0	Bile Liver Urine	(-) (-) (-)
3	K. A.	0 2	Liver Urine	(-) (-)
4	M. S.	0 5	Urine	(-)
5	K. W.	0 2	Urine	(-)
6	K. T.	0 4	Urine	(+)
7	K. O.	0 2	Urine	(-)

表 2 Neonatal Hepatitis

No.	Case	Age	Material	CMV-Isolation
1	T. K.	0y 5m	Urine	(+) +Pneumonitis
2	M. U.	0 3	N. D.	
3	M. A.	0 2	Urine	(+) Hepatitis B
4	M. U.	0 3	Liver	(-)
5	K. T.	0 2	Urine	(-)
6	D. K.		Urine	(+)

分離研究者は難治性肝疾患である新生児（乳児）肝炎、先天性胆道閉鎖症の病因として CMV 感染の関与を知るために、患児より尿、肝組織、胆汁などの材料を得て、ウイルス分離を試みた。

ウイルス分離には HEL (ヒト胎児肺) 細胞の 5~15 代継代を用いた。細胞継代は形の如く行ない、分離材料は抗生物質処理、遠洗後、その上清を用いた。分離材料接種時にはウシ胎児血清 2% 加 Eagle CMV を維持用培地とした。

検索成績を表に示す。すなわち、先天性胆道閉鎖症の 7 例では尿中に CMV を認めたものは 1 例にすぎない。新生児肝炎の 6 例中 1 例の未検索を除き、5 例中 3 例の尿より CMV が分離されている。このうち 1 例は B 型肝炎であることが判明したので、これを除くと 4 例中 2 例の尿中に CMV が陽性であった。

以上の結果より新生児肝炎の一部には CMV の感染していることが明らかである。

文 献

- 1) 中村, 南谷ら: 小児科臨床, 28: 431, 1975.
- 2) 南谷, 荒木: 小児科, 17: 657, 1976.

小児の難治性肝疾患の病因, 早期診断, 治療に関する研究

東北大学医学部小児科教室 今野多助 田沢雄作

I. Lipoprotein-X の半定量とその乳児早期 閉塞性黄疸における診断的意義

1969年, Seidel らは胆道閉塞を伴う黄疸患者血清中に正常血清には認められないリポ蛋白を確認し, この異常リポ蛋白を lipoprotein-X (LP-X) と命名, 又免疫電気泳動法を用いて種々の患者血清について検討し, 肝内肝外胆道系の閉塞時に LP-X が出現することを強調した¹⁾。我々は乳児期の閉塞性黄疸患者血清を中心に小児期肝疾患患者血清について LP-X の検出を試み, 一部はすでに報告しているが²⁾, 今回は LP-X の半定量法による結果を中心に報告する。

対象 は小児肝疾患患児を中心とし, その内訳は表 1 に示すごとくであり, 先天性胆道閉鎖 (Congenital

biliary atresia: CBA) 18 名, 新生児肝炎 (neonatal hepatitis: NH) 19 名を含む合計 99 名である。半定量は血清 LP-X 陽性を認めた CBA 19 例, NH 8 例, 急性肝炎 5 名他 4 名を含む合計 36 名について実施した。

方法 LP-X の検出は Seidel らの免疫電気泳動法を原則とした³⁾。詳細は別紙を参照されたい²⁾。LP-X の半定量法も Seidel らの方法に準じ³⁾, パルピツール緩衝液にて LP-X 陽性患児血清を倍数希釈し, LP-X を検出する最高希釈倍数, 即ち原液, 2 倍希釈液, 4 倍希釈液, 8 倍希釈以上を 1(+), 2(+), 3(+), および 4(+), と表現した。

結果 LP-X は CBA, NH, 急性肝炎, 慢性肝炎, 肝硬変, 孤立性肝のう腫, 先天性総胆管のう腫 および tyrosinosis で検出された (表 1)。CBA では 18 例全例

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

新生児肝炎,先天性胆道閉鎖症の症因は明らかではなく,先天感染が有力な病因として考慮されており,また両疾患は同一病因であるとする説もある。われわれはすでに乳児肝炎よりサイトメガロウイルス(CMV)を分離し,また各種肝疾患ならびに重症疾患における CMV の関与について発表しているが,新生児(乳児)肝炎の原因には CMV のほか,ヘルペスウイルス,風疹ウイルスも挙げられる。新生児肝炎の大きな原因として CMV を肯定する成績も知られる一方,CMV の感染形態である自然感染へ持続排泄という性質上,原疾患に対する病因的意義を明確にすることは他のウイルス性疾患に比して困難を感じる点が少なくない。